27　　終わらない悲しみ　　　　　文法　未然形接続の助動詞まとめ

読解　比喩の示すものをつかむ

はの近臣なり。になりにける時、①におくれ奉りければ、②やがておろしてけり。いづくともなく㋐おこなひありきけり。にて、妻、行きあひたりけれども、あらはれず。にてはにあやめⓐられて、逃げにけり。

さて次の年、帝の御果ての日にあたりて、ども御服脱がⓑむとて、河原にでたりけるところに、

　みな人は花の衣になりにけりのたもとよ③かわきだにせよ

と詠みて、の葉に書きて、あやしのして、さし置かⓒせたりけり。取りて見るに、の㋑手に見なして、「いづら」とて使ひをたづぬるに、見えⓓざりけり。

さるほどに、のちにはになりて、の僧正、とぞいひける。

語注

深草天皇＝天皇の異称。

蔵人頭＝蔵人所の職名。蔵人所は天皇の側近が公私にわたる所用を処理した役所。

初瀬山＝奈良県の近辺の山。

御果ての日＝服喪の終わる日。天皇の死に際しては、一年間、喪に服する。

河原＝賀茂川の河原。喪明けの禊の場所。

苔のたもと＝僧侶の着るの。

僧正＝僧官の最高位。

【原文】

　良峯宗貞は深草天皇の近臣なり。蔵人頭になりにける時、帝におくれ奉りければ、やがて頭おろしてけり。いづくともなくおこなひありきけり。初瀬山にて、妻、行きあひたりけれども、あらはれず。清水にては小町にあやめられて、逃げにけり。

さて次の年、帝の御果ての日にあたりて、殿上人ども御服脱がむとて、河原に出でたりけるところに、

　　みな人は花の衣になりにけり苔のたもとよかわきだにせよ

と詠みて、柏の葉に書きて、あやしの童して、さし置かせたりけり。取りて見るに、良少将の手に見なして、「いづら」とて使ひをたづぬるに、見えざりけり。

　さるほどに、のちには僧正になりて、花山の僧正、遍昭とぞいひける。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

良峯宗貞は［　　　］に先立たれたので出家した。帝の喪が明ける日、［　　　　　　］たちがのために賀茂の［　　　　］にやって来た時に、宗貞は一首の和歌を［　　　　　　］に書き付けて身分の低い［　　　］を使って残していった。人々は宗貞だと探したが見つからなかった。

問二　波線部㋐・㋑の意味を答えよ（㋐は終止形でよい）。〈3点×2〉

㋐〔　　　　　　　　　　〕

㋑〔　　　　　　　　　　〕

問三　二重線部ⓐ～ⓓの助動詞の文法的意味と活用形を答えよ。〈3点×4〉

ⓐ〔　　　　　　〕〔　　　　形〕

ⓑ〔　　　　　　〕〔　　　　形〕

ⓒ〔　　　　　　〕〔　　　　形〕

ⓓ〔　　　　　　〕〔　　　　形〕

問四　［チェック問題］未然形接続の助動詞まとめ

次の傍線部の助動詞について、文法的意味を答えよ。〈2点×4〉

1　公も行幸せしめふ。（大鏡）

2　の谷より出づる声なくは春来ることをたれか知らまし（古今集）

3　き心つかふ人も、よもあらじ。（竹取物語）

4　いと恋しければ、行かまほしく思ふ。（更級日記）

1〔　　　　　　〕　2〔　　　　　　〕

3〔　　　　　　〕　4〔　　　　　　〕

問五　傍線部①を現代語訳せよ。〈6点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問六　傍線部②の解釈として最も適当なものを選べ。〈5点〉

ア　いつまでも悲しみにくれた。

イ　長い間申し訳なく思った。

ウ　そのまま蔵人頭を退いた。

エ　すぐに出家してしまった。

〔　　　〕

問七　傍線部③とあるが、何にれているのか。十字以内で答えよ。〈5点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　〕

問八　本文の内容に合致するものを一つ選べ。〈8点〉

ア　深草天皇にされた宗貞は自分の振る舞いを深く恥じ入りどこへともなく行方をくらましてしまった。

イ　世俗から離れて放浪生活をしていた宗貞は、帝の喪の明ける日、人恋しくなって久しぶりに都に戻ってきた。

ウ　帝の死から年月がち、人々が普段の生活に戻っていくなかで抱いた自身の感慨を、宗貞はさりげなく伝えた。

エ　帝への忠誠心にあふれた宗貞は、後にその歌の実力が世間で認められ、僧正の位にまで昇進するに至った。

〔　　　〕

【解答】

問一　帝／殿上人／河原／柏の葉／童

問二　㋐＝仏道修行をする　㋑＝筆跡〈3点×2〉

問三　ⓐ＝受身・連用形　ⓑ＝意志・終止形

　　　ⓒ＝使役・連用形　ⓓ＝打消・連用形〈3点×4〉

問四　1＝尊敬　2＝反実仮想　3＝打消推量　4＝願望〈2点×4〉

問五　帝に先立たれ申し上げたので、〈6点〉

問六　エ〈5点〉

問七　帝の死を悲しむ涙。（9字）〈5点〉

問八　ウ〈8点〉

【現代語訳】

良峯宗貞は深草〔＝仁明〕天皇の近臣である。蔵人頭になった時、帝に先立たれ申し上げたので、すぐに出家してしまった。（それから）どことも知れず仏道修行しつづけた。長谷寺では、妻と、出くわしたが、（妻に正体を）知られない（ようにした）。清水寺では小野小町にからかわれて、逃げてしまった。

さて翌年、（亡き）帝の御喪の明ける日になって、殿上人たちは御喪服を脱ごうと思って、（のため）賀茂河原に来たところに、

誰も皆美しい花の衣に脱ぎ替えてしまったことだ。のよ、せめて乾くだけでも乾いておくれ。〔＝私の袈裟の袂はいつまでも涙で濡れていることだろうよ。〕

と（良峯宗貞が）詠んで、柏の葉に歌を書きつけて、身分の低い童を使って、置かせたのだった。（殿上人が）取り上げて見ると、良峯宗貞少将の筆跡だと見てとって、「どこだ」と使いの者を問いただすが、（良峯宗貞は）姿を隠してしまった。

さて、その後僧正となり、花山の僧正、遍昭と呼ばれた。

【補充問題】

問１　「おこなひありきけり」（２行目）を解釈せよ。

ア　仏道修行しつづけた。

イ　探して歩きまわった。

ウ　善行をほどこした。

エ　さまよい歩いた。

問２　「みな人は…」の和歌に込められた宗貞の心情の説明として最も適当なものを選べ。

ア　喪服を脱いだ殿上人たちとは違って、帝の死をいまだに深く悲しんでいる。

イ　放浪生活に満足しているものの、優雅に暮らす殿上人を内心うらやんでいる。

ウ　帝の死から年月が経過し、ようやく都に華やかさが戻ってきたことを喜んでいる。

エ　自分だけが俗世間から離れて生活せざるを得ないことを、無念に思っている。

問３　本文の内容に合致するものを一つ選べ。

ア　宗貞は深草天皇のお叱りを受け、行方をくらましてしまった。

イ　妻は生き別れた宗貞と、初瀬山で久しぶりの再会を果たした。

ウ　宗貞は、清水寺で対面した小町に逃げられてしまった。

エ　人々は柏の葉に書かれた和歌を見て、宗貞の筆跡だと判断した。

【補充問題解答】

問１　ア

問２　ア

問３　エ